

高度専門職業人としての教員の資質能力を育成する 教職大学院の授業開発[†]

兵藤 清一*・宮 蘭 衛*・小久保 美子*・高木 幸子*

新潟大学大学院教育学研究科（教職大学院）*

本研究は、教職大学院において、学び続ける高度専門職業人としての教員に求められる資質能力を育成するためには、科目ごとに、その特質を踏まえて資質能力を明確化し、それに即した育成方法を具体化することが重要であることを主張するものである。このために(1)学校現場における具体的事象（実践）を基にした問題意識の醸成、(2)聴き合うことから始める他者との対話、振り返りシートの活用による自己内対話の重視、(3)異年齢、異経験の院生同士のチームによるカリキュラム開発活動の設定という3つの視点から授業開発を行った。その結果「教育課程編成の理論と実践」の科目の特質を踏まえて明確化した資質能力（①学校現場における教育課題を発見し、その解決に向けたカリキュラムの在り方を探究していく力、②カリキュラム等に関する高度な専門的知識、③カリキュラム開発のために協働していく力）の育成に成果を上げた。なお本稿では、「教育課程」を「カリキュラム」概念（計画・実施・結果レベルを含む概念）で捉えて用いる。

キーワード：高度専門職業人、学び続ける教師、資質能力、授業開発

1. 問題の所在

グローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化に伴い、高度化・複雑化する諸問題への対応が必要となっており、学校教育において、求められる人材育成像も変化している。このような変化に対応していくためには、これからの教員に求められる資質能力を明確化し、それらの資質能力を有する、新たな学びを支える教員を養成するとともに、「学び続ける教員像」を確立することが喫緊の課題となっている。

このような中、教職大学院では、高度専門職業人としての教員の養成を目的に、教職生活全体を通じて探究力をもって学び続け、学校現場が直面する課題に対応し得るより高度な専門性に基づく実践力・応用力を身に付けた教員の育成を目指している。

その基本的な性格や在り方は、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新人教員の養成と指導的役割を果たし得るスクールリーダーとなるような現職教員の養成である。実際の授業では、教職大学院における「理論」の学修と学校現場における「実践」を組み合わせ、理論知と実践知を往還する探究的な省察力を育成する学びの実現を目指している（教員の資質能力向上に係

る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議 2013）。

教職大学院において育成を目指す高度専門職業人としての教員に求められる資質能力を明確化していく上で参考となるのは、中央教育審議会で示された、以下の「これからの教員に求められる資質能力」である（中央教育審議会 2012）。

- (i) 教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感、教育的愛情）
- (ii) 専門職としての高度な知識・技能
 - ・教科や教職に関する高度な専門的知識
 - ・新たな学びを展開できる実践的指導力
 - ・教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力
- (iii) 総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）

教職大学院では、これらの資質能力を参考に、高度専門職業人としての教員に求められる資質能力を、科目ごとに、その特質を踏まえて明確化することが必要である。その上で育成方法を具体化し「理論と実践の

往還」による学びを通して、学校現場において多様化・複雑化する諸課題に対応し得るより高度な専門性に基づく実践力・応用力を育成していくことが重要である。

2. 研究の目的

上記のような背景及び筆者の問題意識を踏まえ、本研究では、新潟大学教職大学院において育成を目指す高度専門職業人としての教員の資質能力を、上記の(i), (ii), (iii)を視点とし、それらに沿って科目の特質を踏まえて明確化し、その育成を目指していく。

具体的には、新潟大学教職大学院のカリキュラムのうち、「教育課程の編成・実施に関する領域」の中の共通必修科目である「教育課程編成の理論と実践」において育成を目指す資質能力を、以下のように捉えた。

- (i) 教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力

学校現場における教育課題を発見し、その解決に向けたカリキュラムの在り方を探究していく力

- (ii) 専門職としての高度な知識・技能

カリキュラム開発及びカリキュラム・マネジメントに関する高度な専門的知識及び技能

- (iii) 総合的な人間力

学校現場の多様化・複雑化する諸課題に対応したカリキュラム開発のために協働していく力

本研究では上記のように科目の特質を踏まえて明確化した資質能力の育成のために授業開発を行い、次の3点からその効果を質的に検証することを目的とする。

- ① 学校現場における具体的事象（実践）を基にした問題意識の醸成は、院生の学びにどのような効果をもたらすか。
- ② 認知プロセスの外化を促す、他者との対話と自己内対話は、院生の学びにどのような効果をもたらすか。
- ③ 異年齢、異経験の院生同士のチームによるカリキュラム開発は、院生の学びにどのような効果をもたらすか。

3. 授業開発の実際

3.1. 授業開発の視点

本研究における授業開発の視点は以下の3点である。

- 視点1：学校現場における具体的事象（実践）を基にした問題意識の醸成
 視点2：聴き合うことから始める他者との対話、振り返りシートの活用による自己内対話の重視
 視点3：異年齢、異経験の院生同士のチームによるカリキュラム開発活動の設定

これらの視点は、大学教育の質的転換が問われている今日、大学のこれからの授業で求められている能動的学修（アクティブ・ラーニング）の実現に向けた視点でもある（中央教育審議会 2012）。

視点1では、院生が自ら問題を発見し、その問題意識に基づき、主体的にその問題を解決していく学修プロセスを展開していくため、実践の現場である学校における具体的事象を取り上げ、それらの背景にある理論的側面を探究していけるよう工夫する。その上で、科目全体を通しての院生の問題意識の継続を重視した授業を展開していく。

視点2の他者との対話では、自己の認知プロセスの外化を促すために、教員等と院生、院生同士が、互いの考え等を聴き合うことから、対話や意思疎通を図っていく。それにより教員から院生への知識の伝達・注入の一方通行の授業、受動的な授業ではなく、双方向の授業構成で、共に切磋琢磨し相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創る。

また視点2の自己内対話は、教職大学院の教員養成カリキュラムの中核である「理論と実践の往還」を基にした学びの実現に向けた視点でもある。具体的には、授業において、学校現場での実習や教育実践を題材とした実践事例を研究し、理論に基づく振り返り（省察・リフレクション）を重視していく。その事例研究の振り返りから分かったことや疑問に対してさらに研究するという研究の営みと実践の営みとを往還させていく。

視点3は、急激な社会の変化に伴い、学校現場において多様化・複雑化する諸課題への対応に向けて、多様な他者と協働しながら問題を解決（協働的問題解決）していくための視点である。学校現場では、多様化・複雑化する諸課題への対応に向けて、個々の教員が個別に教育活動に取り組むのではなく、組織として取り組む体制の強化が求められている（中央教育審議会 2015）。将来の予測が困難な時代に、一人では到底解決できない課題に対して、対話や議論を通じて多様な他者の考えを理解したり自分の考えを広げたり深めたりしながら、同僚や保護者、地域の方々等、多様な人々と協働していくことができるよう、異なる年齢・異なる経験値をもつ院生同士がチームで、問題を発見し、解決していく活動場面を意図的・計画的に設定していく。

3.2. 授業開発

本研究は、平成29年度の新潟大学教職大学院のカリキュラムのうち、「教育課程の編成・実施に関する領域」

[論文]

の中の共通必修科目「教育課程編成の理論と実践」における授業実践を基に行ったものである。授業担当教員は宮菌衛，小久保美子，高木幸子，筆者である。

本科目の目標は以下のとおりである。

カリキュラムを編成・実施・評価・改善し，機能させるための実践的な理論と方法を学び，カリキュラムを構想・開発する能力及びその在り方を探究する能力と態度を身に付ける（シラバスより）。

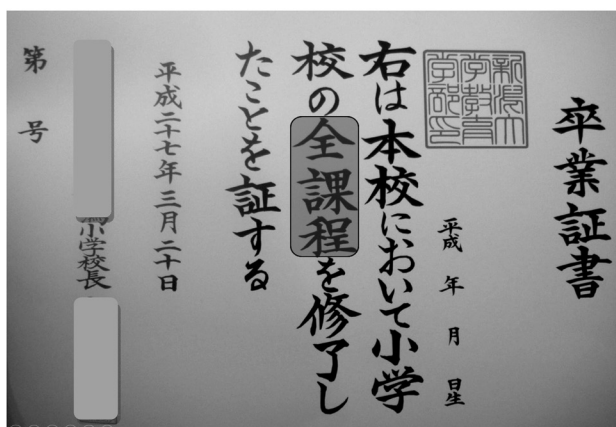
前半部分の「教育課程を構想・開発する能力」とは，科目の特質を踏まえて明確化した資質能力として，(ii)専門職としての高度な知識・技能＝カリキュラム開発及びカリキュラム・マネジメントに関する高度な専門的知識に対応している。また「教育課程の在り方を探究する能力と態度」の部分には，(i)教職に対する責任感，探究力，教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力，(iii)総合的な人間力に対応している。これらは学校を基盤としたカリキュラムを開発する能力やカリキュラム・マネジメントを効果的に行う能力，学校の教育課題を見いだす力，その課題を他者と協働しながら解決していく力等の新たな教育課題や最新の教育改革の動向に対応した力の育成を目指すものであり，高度専門職業人として教職生活全体を通じて学び続ける教員が目指していく資質能力である。このように明確化した，これらの資質能力の育成を目指し，先述した3つの視点から授業開発を行った。

シラバスの概要は，以下のとおりである。

第1回・第2回・第3回

- ・教育課程とカリキュラム
- ・教育課程の基本的要素
- ・教育課程の定義，目的・意義
- ・教育改革と教育課程の歴史的変遷
- ・「これからの教育課程」の理念と役割

図1 卒業証書



第4回・第5回・第6回

- ・多様なカリキュラムの事例研究
- ・カリキュラムの重層性（入れ子構造）
- ・カリキュラム編成とカリキュラム・マネジメント

第7回・第8回・第9回

- ・カリキュラムの編成方法に関する事例研究
- ・カリキュラム・マネジメントの事例研究
- ・確かな学力の育成に関わるカリキュラム編成

第10回・第11回・第12回

- ・教科横断的なカリキュラム編成
- ・豊かな心の育成に関わるカリキュラム編成
- ・人間関係づくりに関わるカリキュラム編成
- ・健やかな体の育成に関わるカリキュラム編成

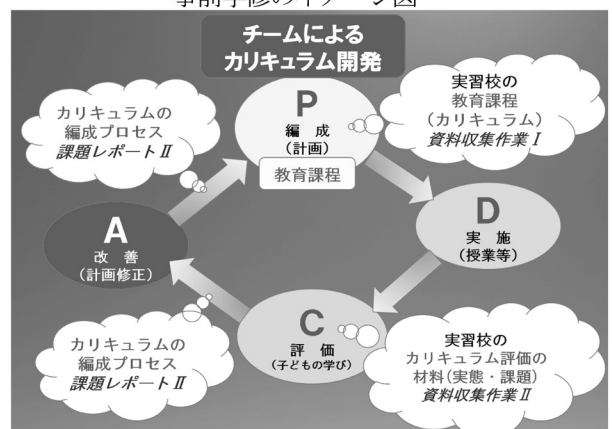
第13回・第14回・第15回

- ・チームで開発したカリキュラムの交流・検討
- ・授業の総括・まとめ

まず，学校現場において，教育課程という言葉を意識して教育活動を行うことは必ずしも多いとは言えない。そこで，授業開発の視点1から，学校現場における具体的事象として卒業証書（図1）を提示し，そこに記載されている「全課程」という語から，教育課程に着目させるとともに，卒業というのは「全（教育）課程」を修了するという意味であることを確認し，その重要性を意識付け，問題の発見につなげていった。その上で，「教育課程とは何か」という本質的な問いを院生に投げかけ，問題意識を醸成していった。

このように，院生は卒業証書から問題を発見し，「教育課程とは何か」という本質的な問いを追究し，その過程でカリキュラムに関する理論的内容（高度な専門的知識）を理解していった。授業後の事後学修として，自己の学びを振り返り，省察する課題を設け，振り返りシートの作成を行った。また，次の授業の事前学修

図2 カリキュラム編成の流れに位置付いた事前学修のイメージ図



〔論文〕

として、実習校におけるカリキュラムに関する資料を収集し、その概要や特徴を説明できるように準備（資料収集作業Ⅰ）し、次時でその内容の交流を行った。

このように、シラバスの構成として、本科目の全授業を通して、「事後学修（授業後の振り返り）→授業における事後学修の内容の交流」、「事前学修（資料収集作業や課題レポート）→授業における事前学修の内容の交流」という流れを作り、問題意識の継続を図った。

また、チームによるカリキュラム開発を行うために、それまでの実践的内容と方法の情報収集である、複数の事前学修（資料収集作業Ⅰ・Ⅱ、課題レポートⅡ）を、チームでのカリキュラム開発のプロセスに位置付け（図2）、シラバス上に意図的・計画的に配置した。

次に、授業開発の視点2から、毎回の授業において、認知プロセスの外化を促すため、教員等と院生、院生同士が、互いの考え等を聴き合うことから、対話や意思疎通を図っていく双方向の授業構成とした。さらに教職大学院における理論の学修と学校現場における実践とを組み合わせ、理論知と実践知を往還する探究的な省察力を育成できるよう、振り返りシートを活用した自己内対話を重視し、以下のような授業実践を行った。

まず、「教育課程とは何か」という本質的な問いについて追究していく過程において、自己の認知プロセスの外化を促すために、ウェビングの手法を用いて、自己内対話しながら、ワークシートに自己の考えを表出できるようにした。それを基にファシリテーションの手法を用いて、教員がファシリテーターとして教員等と院生、院生同士の自由な対話や議論をファシリテートしながら、自己の考えを他者と交流し、双方向の授業を展開した（図3）。その際、表出された多様な考えをファシリテーショングラフィックの手法を用いて黒板に表現し、多様な考えを理解したり、自己の考えを広げたり深めたりしながら、互いの認識の共通点や相違点、疑問点を確認したり理解したりした（図4）。

図3 双方向の授業の様子

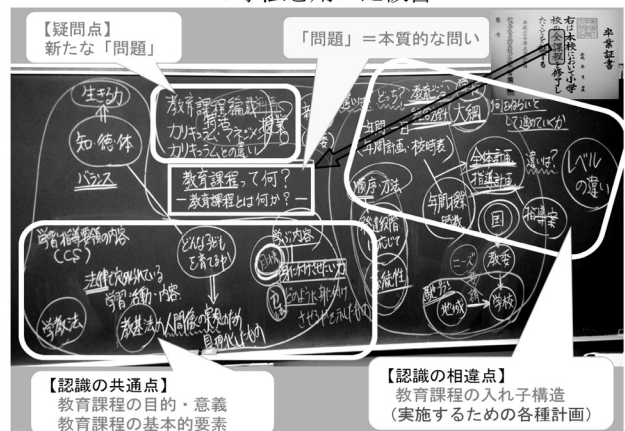


このように他者とかがわる際、自分の考えや主張を一方向的に伝えるだけであったり、他者の考えの意図や真意を捉えず（聴かず）に、自分の考えに引き寄せて捉えたり、自分なりの解釈をしたりして、話がかみ合わず、対話にならないことがある。教職大学院の授業においてもこのような傾向がないとは言えない。他者の考えに耳を傾け、その意図や真意を聴き、対話していくことが、自らの学びを広げたり深めたりしていくための第一歩となる。また、一柳(2014)は「聴き合う関係は互いをともに学ぶ存在として認め合うことに基づいた信頼関係とも言える」といっている（一柳 2014）。互いが協働しながら、学校現場において多様化・複雑化する諸課題に対応していくためには、聴き合うということが必要不可欠なことである。そこで、他者との対話の際に、聴き合うことを意識付け、そのよさを実感できるようにするため、以下のような留意点や交流の方法例を明示した。ただし、この方法例の明示はあくまでも聴き合うことのよさや大切さを実感できるようにするためのものであり、話型スキルを身に付けるためのものではない。

まず、留意点として、聴き手（他者の学びを聴く人）は、話し手の話を聴くことから始めることと、交流の方法例を参考に、話し手の考えの真意や意図等を聴き出し、対話のきっかけを生み出すことを示した。

次に具体的な交流方法例として、話の内容の確認（それは、こういうことですかと、自分の解釈を伝え、内容を確認＝リボイシング）、疑問に思うことの確認（それは、どういうことですか、もう少し説明してください）よくわからなかったことの確認（もう少し具体的に言うとうどうなりますか）、なぜそう思ったかの確認（なぜそう思ったのですか）話を聴いての同意・共感（そうですね、私も同じように思いましたが、その理由は何

図4 ファシリテーショングラフィックの手法を用いた板書



〔論文〕

ですか)等を示した。

これらは、一柳(2010)がいう「先行する他者の言葉を聴き、それを自己の内にとりいれながら、そのうえに自己の考えを重ねて言葉にしていこうとすることで、言葉のつながりは生まれる」という言葉のつながりを意識付けようとしたものであり、「他者の理解や考えをとりいれ、それを自分のものとする過程」である「アプロプリエーション (appropriation)」(一柳 2010)と呼ばれる学びの在り方である。

さらに、本科目の授業では、事後学修として、院生は自己の学びを振り返り、省察するために、振り返りシートを作成した。当該授業中ではなく、振り返りを事後学修とすることで、問題意識の継続にもつながっていくと考えた。その際、シートには、以下の3つの視点が示されており、それに沿って振り返っていく。

一つ目は、知識・理解に関することであり、新たに知ったこと、わかったこと、印象に残ったこと等(内容、学び方等)を具体的に書いていく。二つ目は、思考・判断に関することであり、自分自身の経験や問題意識と関わって、考えたこと、思ったこと、感じたこと等について、その理由を含め、具体的に書いていく。三つ目は、興味・関心に関することであり、興味・関心をもったこと、深めていきたいこと、新たな問題意識、疑問点等を自由に書いていく。

上記の3つの視点を基に、自己の学びを振り返ることで、自分が何をわかり(知識・理解)、どのように考え(思考・判断)、何に興味・関心をもったり、疑問をもったり(興味・関心・問題意識)したのかを、文字化し明確化していく。それにより、知識・理解に関する客観的な事柄(理論的側面)と、思考・判断や興味・関心に関する主観的な事柄(実践的側面)を区別したり、関連付けたりしながら認知していき、理論と実践を往還する省察力の育成につながっていくと考えた。また、振り返りシート提出後は、教員がその内容に対してコメントを記入する。院生に返すコメントの意図(ポイント)は、院生の振り返りの内容の評価を伝えるためではなく(授業における院生の学びを見取る評価材料としての側面があることはもちろんである)、院生の学びをさらに深めるために、理解や捉えが曖昧な部分、具体的な実践との関連(つながり)が見えなかったり、意識できるようにしたりする部分、考えを広げたり、深めたりしたい部分、問題意識を持ったり、深めたりしたい部分などに対して、具体的な内容を示すよう促したり、どのように考えるかをたずねたり、

院生がその考えに至った理由をたずねたりしていく。

このコメント入り振り返りシートを基に、次の授業で院生の自己内対話を促していく。これにより、自己の学びを再認知するとともに、「理論と実践の往還」による学びを意識し省察できるようになっていくと考えた。

最後に授業開発の視点3から、学校現場における多様化・複雑化する諸課題への対応に向けて、対話や議論を通じて多様な他者の考えを理解したり自分の考えを広げたり深めたりしながら、チームで協働していくことができるよう、以下のような授業実践を行った。

学校では、異なる年齢・異なる経験値をもった教職員集団で協働しながらカリキュラム開発を行っていく。このような状況を踏まえ、異なる年齢・異なる経験値をもつ院生同士がチームを作り、学校現場の教育課題を発見し、その解決に向けて、チームで協働しながらカリキュラム開発の経験の場を組織した。

具体的には、学校現場からの現職院生2人と学部新卒院生1人の計3人で1つのチームを編成し、実習校で収集した、カリキュラム評価のための材料(資料収集作業Ⅱ)を基に実習校の実態を分析し、そこから教育課題を発見していった。その上で、以下のようなカリキュラム開発のテーマを参考に開発していった。

- 「確かな学力」の育成に関するもの(各教科等、教科等横断)
- 「豊かな心」の育成に関するもの(道徳教育、特別活動、学級活動等)
- 「健やかな体」の育成に関するもの(教科等横断)
- 新しい時代に求められる資質・能力の育成に関するもの(各教科等、教科等横断)
- 社会の変化への対応(今日的課題・現代的課題の解決)に関するもの(国際理解教育、外国語教育、情報教育、キャリア教育、E S Dを踏まえた環境教育、防災教育を含む安全教育、主権者教育、食育等)
- 校種間連携に関するもの(幼保小連携、小中一貫・連携、中高一貫・連携)

※校種間連携に関する内容は上記テーマを基にする。

4. 授業開発の検証

4.1. 検証方法

本科目の特質を踏まえて明確化した資質能力の育成に関して、設定した評価規準に照らして、授業担当教員間で協議し、院生の振り返りシートや課題レポートの記述内容を抽出・検討し、「2.研究の目的」で示した3点から、授業開発の効果を質的に分析・検証した。

4.2.授業分析

4.2.1 学校現場における具体的事象(実践)を基にした問題意識の醸成の効果

全院生(15人中15人)の振り返りシートに、カリキュラム開発に対する問題意識や探究心の高まりにかかわる記述内容が見られた。以下にその一部を示す。

<データ1> ※下線は筆者

- ・自校の教育課程が、学校・児童及び地域の実態に
応じたものになっているのか知りたい。
- ・中教審答申をもう少し読み込み、ここで目指されて
いる子どもの姿に階層性があるか調べたい。
そして、それを具現化する手立てを考えたい。
- ・「自校における教育課程」がどのように考えられ
編成されているのかを調べてみようと思う。
- ・キャリア教育の視点を踏まえ、どのような力を身
につけさせていくか考えていきたい。教育課程作成
の一端を担うことができるようになりたい。
- ・実習校での教育課程編成の際に力を入れているも
のは何か、実習を通じて深めていきたい。
- ・地域の課題や校長先生の考えを統合して教育課程
が作成されるのか。実際の場面に立ち会ってみたい
し、具体的な作成過程を見たい。

上記の記述に見られるように、「知りたい」「調べたい」「考えたい」「できるようになりたい」「深めていきたい」等、自らの興味・関心や問題意識、探究したいこと等が述べられている。このような記述から、教育課程に対する興味・関心が高まり、問題意識が醸成されていること等が窺えるとともに、それらに基づいて探究していこうとする姿勢や態度が窺える。

4.2.2 他者との対話と自己内対話の効果

複数の院生(15人中13人)の振り返りシートから、カリキュラムに関する高度な専門的知識の理解にかかわる記述内容を抽出した。以下にその一部を示す。

<データ2> ※下線は筆者

- ・「教育課程とは何か」という問いから、認識の共通点や相違点、疑問点を共有した後に、教育課程の定義などを学んだことで、より深く印象に残った。
- ・ウェビングの手法を用いて、院生がかかわり合いながら思考したことにより、「教育目標」「指導内容」「授業時数」という要素が明らかになった。
- ・教育課程が教育ビジョンや指導計画、さらには指導案をも含んでいることがわかった。(中略) 1つ1つの次元は違う
- ・他の院生の考えを聴く中で、全体計画という大きな

ものから指導案などの細かいものまで様々な次元があることがわかった。一つの授業も、教育課程の中の一つであり、非常に重要であると感じた。

- ・教育課程には、全体にかかわるものから個々のレベルのものまでさまざまな形で指導計画・指導案として位置づけられていることがわかった。
- ・学習指導案、教育計画、大綱、市町村の教育ビジョンなどのつながりがわからず、すべて点で見ていた。

上記の記述に見られるように、他者との認識の共有や他者とのかかわり合い、他者との考えの交流から、「より深く印象に残った」「明らかになった」「わかった」「重要であると感じた」等、実感を伴った理解につながったとの振り返りが多く見られた。また、教育課程の定義や構成要素、カリキュラムの重層性(次元の違い)等の具体的な専門的知識に関する記述も多く見られ、それらの理解状況を読み取ることができた。

次に全院生(15人中15人)の振り返りシートに、他者との対話のよさへの気付きにかかわる記述内容が見られた。以下にその一部を示す。

<データ3> ※下線は筆者

- ・「教育課程」や「中教審答申」など一人ではうまく理解できなかったことも、仲間といっしょに考えたり学んだりすることで理解を深めることができるということを実感できた。
- ・話し合いをする中で、ほかの人の話を聞きながら、それが徐々に自分の考えが整理できたと思う。
- ・「教育課程とは何か」という問いを出発点として様々な人の考えを聞き、その過程で自分の解釈の整理ができ、また、新たな発想が浮かぶこともあった。
- ・今回の授業では、学習者が協働的に問題解決学習に取り組んだと感じた。
- ・「教育課程とは何か」を考えるファシリテーションでは、担当の先生、現職およびストマスの様々な立場の人間の考えを共有することができる協働的な学びだと感じた。今後様々な授業を通して、他者の考えに触れ、自らの学びを深める姿勢を大切にしていきたいと感じた。

上記の記述に見られるように、他者と一緒に考えたことにより理解が深まったこと、他者の考えや話を聴きながら自分の考えが整理できたこと、そこから新たな発想が浮かんだこと等を実感していることが窺える。また、自らの学修体験により、他者との対話を通じた協働的な学びのイメージを持ったり、他者の考えに触れ、自らの学びを深めることを大切にしたいという学

[論文]

びの姿勢について述べたりしている。このようなことから、聴き合うことから始める他者との対話のよさに気づき、他者の考えをじっくり聴くことが自己の学びを広げたり深めたりすることを実感していると捉えられる。また、これは、他者の理解や考えをとり入れ、それを自分のものとしていく学び（アプロプリエーション・appropriation）の姿と捉えることができる。

次に、複数の院生（15人中12人）の振り返りシートから、理論と実践を往還する探究的な省察に関する記述内容を抽出した。以下にその代表的なものを示す。

<データ4> ※下線は筆者

- ・中教審答申の読解をグループで交流した際、勤務校である小学校でも、昨年度末に、地域の方々と学校職員とで子どもたちの教育について語り合う「子どもを語る会」が実施された。学校が学校だけで頑張る時代が終わろうとしている。社会における学校の在り方が大きく転換する只中にあるのだと感じた。
- ・実習校の学校経営方針の柱に「キャリア教育の視点」をもった教育活動がある。今日の授業において新指導要領改訂によって求められる教育課程はキャリア教育の目標である基礎的・汎用的能力を児童に身につけさせることと大きなつながりがあると考えた。

上記の記述に見られるように、中教審答申等の読解から、新学習指導要領の理念やその背景（理論的側面）を理解し、そこから（理論に基づき）、自分が勤務していた学校（実習校）での実践を省察し、わかったことや考えたこと、感じたこと等を述べている。このような記述から、教職大学院における「理論」の学修と学校現場における「実践」の具体を往還させながら、探究的に省察していることが読み取れる。

4.2.3 異年齢、異経験の院生同士のチームによるカリキュラム開発の効果

最後に、全院生（15人中15人）の課題レポートから、カリキュラム開発のための協働のよさや在り方にかかわる記述内容を抽出した。以下にその一部を示す。

<データ5> ※下線は筆者

- ・編成の際に、できるだけ様々な立場の教職員が当事者意識をもち、かかわることが大切であると感じた。今回のチームでの編成作業を通して、異なる年代、学校種、専門性等の人が集まり対話し、進める中で各教科・領域の関係性、どこでどのような資質・能力を身につけるか、学校・家庭・地域は何を行うか等について深く考えることができた。
- ・3人チームで実際に教育課程の編成に取り組み、チ

ーム内での対話を手掛かりに少しずつ形にしていくことができた。「対話」を核とした「協働」を体感することができたように感じた。三者三様の考えから一つのものを作り出すことは困難な面が多々あることは事実だが、目指すもの（目指す児童の姿）が明確になっていることで、自然に折り合いが生まれ、収束的な力や同方向のベクトルが生まれていくことを感じることもできた。

上記の記述に見られるように、様々な立場の人が当事者意識を持ってかかわっていくことの大切さ、異なる年代や経験値をもつ人々の対話による考えの深まり、目標の明確化が協働における方向性の共有や考えの折り合いを生むこと等、カリキュラム開発のための協働のよさや在り方について実感を伴って理解している。このチームによるカリキュラム開発は、協働的問題解決を図る活動であり、学校現場における異なる年齢、異なる経験値をもつ集団における協働的な営みを想定している。この活動が院生の学びの経験となり、実際の学校現場でカリキュラム開発を行う際に、有効に作用する可能性が大いにあると考えている。

以上、代表的な記述のみを抽出したが、カリキュラム開発のための協働のよさへの気づきは、院生全員（15人中15人）が記述していた。その他、カリキュラム及びカリキュラム・マネジメントに関する高度な専門的知識の理解にかかわる記述も詳細に書かれていた。ここでは紙面の都合上、割愛する。

5. 研究の成果と課題

本研究は、高度専門職業人として学び続ける教員の資質能力を育成するための教職大学院における授業開発であり、その成果と課題は、次のとおりである。

まず、学校現場における具体的事象（実践）を基にした問題意識の醸成の効果については、具体的な学校、児童・生徒、地域の実態に目を向け、教育課題を発見し、その解決に向けたカリキュラムを開発していきたい、どのように開発すればよいのか等、探究していこうとする記述が全院生の振り返りシートから見取ることができた。このことから、育成を目指した資質能力のうち、「学校現場における教育課題を発見し、その解決に向けたカリキュラムの在り方を探究していく力」の育成に効果があったと考えられる。

次に、認知プロセスの外化を促す対話について、聴き合うことから始める他者との対話を意識したことにより、カリキュラムに関する高度な専門的知識を一面

[論文]

的ではなく、他者が認知したことを踏まえ、多面的・多角的に捉えることができた。そして振り返りシートによる自己内対話で、自己の学びを省察しながら、その知識（理論）に関して、実践と関連付けて具体的に説明する等の記述が多く見られた。そして自己の考えが広がったり深まったりすることを実感できたという記述も多く見られた。このことから、育成を目指した資質能力のうち、「カリキュラム開発及びカリキュラム・マネジメントに関する高度な専門的知識」について実感を伴って理解していくことに効果があったと考えられる。

最後に異年齢、異経験の院生同士のチームによるカリキュラム開発について、他者との対話も含め、協働的な学びのイメージやそのよさを実感できたという記述が多く見られた。このことから、育成を目指した資質能力のうち、「学校現場の多様化・複雑化する諸課題に対応したカリキュラム開発のために協働していく力」の基礎の育成に効果があったと考えられる。

しかし、協働していく力の基礎として、協働することのよさは実感していたが、協働していく力自体が育成されたかどうかの検証は不十分であった。その点についての検証は、今後の課題としたい。

引用文献

教員の資質能力向上に係る当面の改善方策の実施に向けた協力者会議（2013）大学院段階の教員養成の改革と充実等について（報告）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/093/houkoku/attach/1340445.htm（参照日 2017. 02. 20）

中央教育審議会（2012）教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/08/30/1325094_1.pdf（参照日 2017. 02. 28）

中央教育審議会（2012）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて（答申）

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf（参照日 2017. 03. 07）

中央教育審議会（2015）チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/02

/05/1365657_00.pdf（参照日 2017. 03. 14）

一柳智紀（2010）他者の考えをとりいれた言葉のつながり「教師の言葉とコミュニケーション」教育開発研究所 P84. 85

一柳智紀（2014）聴き合う関係と存在としての声「対話が生まれる教室」教育開発研究所 P14

※ 本論文は、授業担当者間の協議を踏まえ、兵藤が全体をまとめ、執筆した。

SUMMARY

The purpose of this research is to foster competencies required for teachers as advanced professional persons to continue learning at graduate schools of education. It asserts that it is important for each subject to clarify competencies based on the characteristics of the subject and to embody the method to nurture the clarified competencies. For this purpose, author developed lessons from three viewpoints. (1) Fostering awareness of problems based on concrete practices at schools, (2) Emphasis on dialogue with other people starting from listening to each other, and self-dialogue by utilizing reflection sheet, (3) Setting of curriculum development activities by teams of graduate students of different ages, different experiences.

As a result, author succeeded in nurturing competencies that were clarified based on the characteristics of the subject of "Theory and practice of curriculum development" (① The ability to discover educational challenges at school scene and to explore the way of curriculum to solve the educational challenges, ② Advanced expertise on curriculum etc. ③ The ability to collaborate for curriculum development). In this paper, author use "kyouikukatei" as a concept of "curriculum" (concept including planning, implementation and result level).

KEYWORDS:

ADVANCED PROFESSIONAL PERSONS,
CONTINUE LEARNING TEACHERS,
COMPETENCY, TEACHING DEVELOPMENT

2018 年 10 月 5 日受理

† Seiichi HYODO*: * Graduate School of Education, Niigata University 8050, Ikarashi 2no-cho, Niigata City, Niigata, 950-2181 Japan